

1 果樹の果実を加害する主要加害種はチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシで、熊本県ではチャバネアオカメムシの比率が最も高い。

2 生態・形態

主要加害種の成虫は雑食性であり、各種の果実を摂食するが、幼虫の繁殖を可能にする餌はスギ、ヒノキのきゅう果など比較的少なく、繁殖源はこれらの山林であるとされている（原則として果樹園の中では繁殖しない）。越冬後成虫は一般に春～夏にかけてはサクラ、クワなどで増殖しながら移動するが、繁殖量は少なく、発生源は7～8月にかけてスギ、ヒノキでの産卵、繁殖が主体になると思われる。その後、餌が豊富にある場合は山林に留まるが、餌の状態が悪くなると植物間の移動が盛んになり、果樹園へ飛来する機会が多くなると考えられる。3種とも年1～2回発生するが、成虫の生存期間が長く、しかも長期間にわたって産卵するので世代間の区別は困難。

チャバネアオカメムシ

体長10～11mm、光沢のある緑色で前翅は褐色。成虫は落葉や灌木の茂みのなかで越冬する。

ツヤアオカメムシ

体長14～17mm、光沢の強い緑色で、暗色の小さな点刻がある。成虫は常緑広葉樹の樹冠内で越冬する。

クサギカメムシ

体長13～18mm、暗褐色の地に不規則な黄褐色の斑紋がある。成虫は家屋など雨の当たらない場所で集団で越冬している場合が多い。

3 被害

カメムシ類による果樹の被害は、外部より飛来した成虫が果実に口針を差し込んで汁を吸うことによって起こる。一般に被害果は地上に落ちたり、発育が不正常で変形したりする。

カンキツ類

果実の着色始めの頃から飛来し、着色の早い樹を集中的に加害する傾向があるため極早生温州、早生温州で被害が多いが、普通温州ではやや少なく、中・晩柑類では少ない。加害部は外見上不明であることが多いが、口針は果肉まで達し、果皮を剥いてみるとアルベド（果皮内側の白い部分）に褐色の斑点が見られる。加害が激しいと落果する。

カキ

幼果期の被害では落果が多いが、それ以降は落果は減り、果実に黒色斑点を残す被害が増える。落下する果実は、害を受けてから2～3日のうちにうんだような状態になり、ヘタを残して急速に落果する。吸汁跡は1果につき数カ所の場合が多い。被害にあっても落ちなかった果実には、被害後7から10日で吸汁跡が丸くへこみ、その中央部の果皮下が黒変した状態の斑点になり、内部はスポンジ状になっている。

4 防除対策

カメムシ類は、果樹園外の山林で増殖した成虫が飛来して害を及ぼすので、地域や園の立地条件により被害状況は異なる。現在のところ、特に激しい被害を認めていないが、ピーク時の誘殺数は平年より多くなっている。また、夜間に好適な果実を求めて移動するので、現在被害の見られない園であっても園内をよく見回り、早期発見、早期防除に努める。

(注意報について)

病虫害発生予察注意報は、農作物に対し、重要な有害動植物が多発することが予想され、かつ早目に防除措置を講ずる必要が認められる場合に発表される。

(過去の果樹カメムシ類の注意報発令状況)

果樹カメムシ類については、H12.6.7、H11.9.29、H10.9.1、H8.7.8、H7.8.28、H4.8.6、H3.9.12、H2.9.3、H1.9.18 に注意報を発表している（平成元年以降）。